

## 「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

長堤や花の雲追ひ花神追ひ 東 祥子

今年の桜は見応えがあった。見上げれば幾本もの満開の桜が雲のように並び心に迫る。作者はそこに花の精を感じ取り、長堤を漫ろ歩く。「花の雲追ひ花神追ひ」の「追ひ」のリフレインは作者の高揚感を示して巧み。

鳥唄の裏声 あはれ春の月 荒尾寿美江

沖繩の鳥唄。嘉手苧林昌、登川誠仁、大城美佐子などの名人を想う。唄で言えば「月ぬ美(かい)しゃ」。月の美しさと、日に日に豊かさを増す娘の美しさとは同じだね、と歌う。八重山を代表する子守唄だ。「月」とは人間の魂を映し出す存在だったという。心を照らされながら歌う唄は、しみじみと哀れを誘う。

節電の夜や三月の雪あかり 伊澤やすゑ

今年三月の大地震。東北地方では停電が多かったと聞く。掲出句、春雪が残っていて節電の乏しい灯に少し輝いている。東日本大震災の原発事故の時にも節電が要請され、東京でも昼間の電車は電灯を消して走った。消灯

の電車には何の違和感もなく、このまま続いてもいいと思っただけだったが、どういう訳か再び、眩いばかりに灯して電車が走るようになった。雪明りの美しさは、節電してこそ感じられるのかもしれない。

地にくさ白鳥帰る空ありや 石垣喜代子

戦は人類が骨などを武器に使用したときから生じた。個人的な殴り合いでなく、集団と集団が武器を介して争う。国内の戦、国同士の戦。宇宙から全世界が監視され、空をミサイルが行き交う。テレビでは殺戮のドラマが横行し現実社会でも「核」を威しに使いつつ侵略が進み多くの民が死に、また避難民となっている。掲出句の「地にくさ」の言葉は重い。白鳥が帰っていく空は本当にあるのかしら? 「空ありや」もまた重い言葉である。

ぶらんこや姉弟の喧嘩買ふ 岩根 甲

姉が弟を助けるため喧嘩を買ったのだ。ぶらんこ遊びの最中に幼子がいじめられている景を想い浮かべた。坂本龍馬の姉みたいな、気丈な姉が見かねて「可愛い弟に何するのさ」と言ったかどうか。作者の思い出からの一句と見た。

男子校履を投げ合ひ卒業す 牛込はる子

自分の靴を投げ合うのは如何にも男子校らしい慣習。しかし、門外漢には、この靴がその後どういふふうに戻されるのか、持ち主にちゃんと帰ってくるのか、まさか裸足で帰宅はしないだろうなどと、心配が尽きない。無事卒業できた喜びがこの履投げに凝縮している。

すつばさは覚悟の上や夏蜜柑 内海 範子

夏蜜柑を見ただけで酸っぱい唾が出てくる。だけど、食べたい。その気持ち「すつばさは覚悟の上や」と言わせた。厚い皮を剥ぎ、一房一房を丁寧に剥ぎしゃぶりつく。酸っぱいなア！ 唾液は歯の健康に良いという。夏蜜柑らしさが上手く表現されている句。

秩父嶺の霽れて麓は棚霞 大下 書樓

雨が上がり、遠くの嶺が少し晴れてきた。でもその麓はまだ水分が籠もっていて霞んでいる。それも棚霞。横にすつと棚引いていて、春らしいこの風景を作者は好きなのだろう。心に残る春の山。

鷹鳩と化すや長子は還曆に 太田 裕子

「鷹化して鳩と為る」は七十二候の一つで、啓蟄後の三月十六日から二十日までの間。中国古来の伝承が日本に伝わった想像的な季語である。この句では長子が還曆

に達したと詠む。鷹化してだから、若い頃の突っ張っていた性格が丸くなったのだろう。働き盛りの苦勞を乗り越えて我が子が無事六十歳を迎えたという喜びを「鷹鳩と化す」の季語を借り、しんみりと表現した。

春泥を丸めて惑ふ手の汚れ 小河原政子

子どもの泥遊び。春泥に手を突っ込んで丸めたのはいいのだが、その手をふと眺めたときに、汚れた手をして家に帰ったら叱られてしまう、どうしよう、という戸惑いを子どもながらに感じた。その一瞬の表情が可愛い。

願はくは海原に咲け山桜 金子かほる

東日本大震災時の津波で亡くなった多くの人々。海原に眠るその魂に、作者は満開の山桜を送る。すると、どうだろう。みるみるうちに海原は桜に埋め尽くされた。「願はくは」は勿論、西行の歌（願はくは花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ）に因む。

姨捨の療棟窓下桜咲く 金子 学

今回の作品はすべて作者療養の様子を伝える。掲出句の姨捨から、初めは作者が信州の姨捨山付近の施設で療養しているのかと思つたが、いやいやこの姨捨は「姨捨伝説」を踏まえ、我が身が現在姨捨状態で、独りぼつち

で療養していると詠んでいるのではないかと思うように至った。病窓から美しい桜が見えるという。姨捨などと言わないで、何とか早く回復し帰還して欲しい。

梅 香る 新選組の道場跡 金田 知子

この句でいう「新選組」とは近藤勇や土方歳三、沖田総司、井上源三郎、藤堂平助、山南敬助など天然理心流の剣術を学んだ者たちを指す。浪士隊として京都へ上る前まで稽古していた多摩の道場の跡が、都下の日野市に残っている。歴史に翻弄され血生臭い武闘に青春を捧げた彼等。「梅香る」はその青年たちへのオマージュ。

冴返る薄手の衣二重三重 金田 喜子

今春は例年になく気候の変動が著しく、体温の調節に苦労した。一度仕舞った冬着をまた出して着た人もいるし、冬着では逆に暑いので、この句のように薄手の衣を幾枚か羽織って調整し、自分なりの健康を保った人もいる。「二重三重」がその様子をうまく伝えている。「薄手の衣二重三重」の語感も良い。

深鍋に揺らぐ若布や海を恋ふ 菊地 孝枝

葉山の漁港で若布を干しているのを今春偶然に見た。如でて吊した若布を家族総出で広げている。全体に日が

回り適度な浦風に吹かれて若布は美味しく仕上がるのだろう。この句では夕食の支度なのか若布を深鍋に入れてある。その揺らぎに作者は海を想い、心安らいだ。

デイケアの車続々花の山 北 好夫

介護の通所サービス。桜の時季ともなると施設に通うご老人たちの花見がある。施設の企画により桜の美しい場所へ、施設の車に分乗して出掛ける。この句では「花の山」。その車が続々と桜山に向かう。他の幾つかの施設の車も加わっての大層な賑わい。「車続々」がこの句の要。句のテンポがいい。

名山の気を鏤めて大氷柱 栗原 季星

数年前に奥秩父の「三十槌の氷柱」を見た。岩清水が凍り作り上げた氷のオブジェとでも言うべき美しい大氷柱だった。掲出の句の大氷柱は同じ秩父でも別の氷柱なのだろうか。「名山の気を鏤めて」の迫力ある措辞から、ダイナミックな大氷柱が想像される。

まだかまだか咲くを待つ待つははの梅 小唄あゆみ

「まだかまだか」と「待つ待つ」の畳み掛けた調子が梅を待つ心に適っている。亡き母の面影を梅の花に見たのである。作者もまた、春の訪れをひたすら待つ。

囀りやナイフを深くカステラに 小泉まり子

ナイフが沈むようにカステラに入っていく。窓から鳥がその様子を囀すかのように囀っている。「深く」はカステラを人数分、均等に切る作者の慎重な気分を伝える。囀りを聞きながらの憩いのひと時がよく見える句だ。

手をひらき花ふぶぎ追ふ兄妹 小濱けえ子

花吹雪、飛花落花。先日はうら若き女性が、舞う桜を嬉しそうにジャンプして掴んでいるのを見た。この句では幼い兄と妹である。流れてゆく花吹雪を見つけてそれをどこまでも追いかけていく。幸せというものは、小さな手の平の中にある。

梅若の涙の雨や鴨の雛 小林ゆきお

旧三月十五日は梅若丸の忌日。梅若塚のある隅田川沿いの木母寺では梅若忌大念仏法要が催される。この日に降る雨を「梅若の涙雨」といい、掲出の句はそれを詠む。鴨の雛を見たときの感慨だが、親のあとを追う雛がきつと梅若丸のように思えたのだろう。品格のある一句。

サロメならプーチンの首桜かな 小林 玲

ヨハネを斬らせその生首に口づけしたというサロメが現代に生き返り、ロシアのプーチン氏の首をとる。桜は

滴る血のようにも思えて、この句は無気味な雰囲気醸し出す。オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の英訳本に何枚かのサロメを描いたオーブリー・ビアズリーだったら、他国を侵略した自己陶醉のプーチン氏を、プーチン氏の首を、どのように描くだろうか。

春愁の革張りの椅子純喫茶 斉藤久美子

春愁に相応しい場所というものがあらし。純喫茶。それも革張りの椅子を置く純喫茶。若い人から見れば超ダサイと思われるかもしれないが、その椅子に深く腰掛け、ゆっくり顔を曇らせればもう春愁である。何となく遣る瀬ない気持ちになる。ところで、日本人は「純く」というのが好き。現代でも「純文学」「純米酒」「純正インク」の名を見る。俳句は「純俳句」とは言わない。

戦争で地球落ちさう春の月 佐藤 和子

「地球落ちさう」に驚いた。地球の環境が最悪になり生物が棲めないようになったとしても地球は太陽を回り続けると思っていたからである。地球を支配しているかのごとく傲慢な所行を繰り返している人類。これに愛想を尽かした地球が自らの命を絶つということは将来あるかもしれない。そうなると「春の月」は何処へ。

福は内豆ぶつけても遺影笑む 島 昌子

わざと遺影に豆を打ったわけではない。勢いよく「福は内」と投げたその福豆がたまたま机の遺影に当たったのだろう。遺影はいつも微笑みを湛えていて、作者の心の支えとなつてゐる。豆が少々当たつたくらいで遺影は怒らない。むしろ、元気に豆を撒く作者を慮り、いつもより微笑んでいるのではないか。そう思いたい一句。

黄水仙気付きしころの恋心 清水 悠太

黄水仙と初恋の取合せは、ぼくも過去に作つてゐる。この句では「きずい」と「きづき」で先ず言葉遊びをしている。「そんなことを貴方は気づいせん」などと駄洒落を言つてゐるわけではなく、真面目な遊び心が初々しい。ぼくは小学校低学年での初恋だったが作者は如何に。

花満開戦禍の国へ届けよと 首藤 久枝

人類の滅亡時期を示す「終末時計」の残り時間はあと百秒ほどだという。地球環境の破壊による天候異変はもとより、世界各地での様々な分断、国際テロや第三次世界大戦になりかねない軍事侵略が進んでいるけれども、それを直接止める手立てが無い。その現状を憂い平和を祈念してゐるのがこの句。せめて満開の桜でも届けたいという気持ちを大切にしたい。

彼岸入真赤な花を挿しにゆく 新海あぐり

作品全体がウクライナ侵攻を匂わしているので、この句も或いはそうかも知れない。でも、春の彼岸に新海家累代の墓に参つた句とも思える。「真赤な花を挿しにゆく」の語調はまことに強く、その言葉の響きを聞くだけで、命を大切に思う作者の優しい心が窺える。

屋根雪の塊落す薄日かな 菅原 淑子

古歌の「日かげさしこぼしづれもぞする」の景を想う。重く積まれた屋根の雪が薄日により徐々に崩れてゆき、その塊を落したのである。とても危険で、大怪我をした人もたくさん居る。この「薄日」は微妙な日差し。岩手にお住まいの作者の心にはどのように映つただろうか。

雪割や小流れ吠ゆる郷暮し 杉淵真喜子

杉淵さんの故郷は秋田。雪割は春になつて家の回りや道路などに積つた堅雪を鉞や鋸で除き取ることをいう。その雪が解け、雪解水となつて小川に注いだのだから、「小流れ吠ゆる」はその甚だしい流れの音。毎年帰郷するたびにそういう自然を体験する郷暮し。ふるさと再発見の一句である。

凍て道や歩き始めの子のやうに 鈴木 智子

子どもが年老いた親を介護するのは「最後の育児」だと誰かが言っていた。もはや我々は一旦体調を崩せば、子どもに戻るのである。この句の「歩き始めの子のやう」を目にした時、その現実に頷いた。転びませぬように。

水温む昔は川の貝を捕り 鈴木 藤子

回顧の一句。水温む頃となり「昔はこの川、あの川で貝を捕ったなあ」と。蜆の類だろうか。ぼくが育つた隅田川の駒形橋辺りも、古書によると蜆が結構たくさん捕れた由。水温むの喜びがよく表現されている句と思う。

栄光の名の草花や仏の座 高橋満利子

春の七草。せりなづなごぎやうはこべらほとけのざすずなすずしろ。この中でも、とりわけ仏の座は誰が名付けたのか、まさしく「栄光の名」である。先日は農道を歩いていたら赤紫の花々が一面に美しく咲いていてそれは紫雲英ではなく仏の座の花だった。栄光の花である。

自分史に愉しき頁青き踏む 高橋美智子

自分の長い歴史の中には哀しかったこと、愉しかったこと、忘れてしまいたいこと、いつまでも覚えていたいことなど、様々なシーンがある。作者の自分史では「青き踏む」の春の行楽が愉しい出来事として記憶に残って

いる。勿論、今も踏青は愉しみであって、この句は前向きに生きようとしている作者の自己確認の句となった。

見はるかす前も後ろも芽吹山 竹森 美喜

どこを見ても、植物はまるで申し合わせたように一斉に芽吹く。都会でなく山に囲まれた地域では殊に芽吹きが濃く、疲れた身体を癒してくれる。この句「前も後ろも」により情景が広がった。「見はるかす」が絶妙。

春や銀輪風にプリーツひるがへる 田中 京

「春風に」でなく「春や銀輪」と字余りにして、且つ強く切ったのが効を奏した。「風にプリーツひるがへる」の風を切つて自転車を漕ぐ姿がとて若々しく、健康的で気持ちのよい句に仕上がっている。

風を呼ぶ地球は青きかざぐるま 寺田 幸子

地球が青い風車だという。風車はよく水子地蔵の辺りにたくさん回っているが、決して不吉なものではない。沖縄では風車をカジマヤーと読む。それは数え九十七歳のお祝の行事を指す。オーブンカーに乗り風車を持った老人はこの時、再び子に戻るとされる。輪廻転生。地球という風車がいつまでも微笑んでくれますように。

北窓開く幼なはいつも小走りに 長井 敦子

北窓塞ぐが冬なら、北窓開くは春。寒風が入り込まないよう目張りしていた北窓を開くのである。その窓から覗くと幼子が小走りに走っていく。「いつも」という言葉には、作者自身の幼い頃の姿も含まれていそう、長い歳月が思われる。因みにぼくの家は東西に窓があるため北窓塞ぐは叶わない。むしろ大西日が当たって暑いので「西窓塞ぐ」という季語があつたらいいなと思うほど。

女車夫 駆くる 墨堤 桜 東 風 中嶋きよし

「閨」の浅草吟行のときの作品。体育会系の若者の引く観光用人力車がコロナ禍の間を縫い復活。男性に混じり女性の車夫も元氣一杯、車を引いて墨堤を駆けける。東風は、春に太平洋から大陸の方へ吹き始める風がいい、いよいよ春の到来を知る。この句では桜の時季。〈夕東風や海の船るる隅田川 水原秋櫻子〉。

白白が沸き立つてゐる 白木蓮 中代 曜子

白木蓮の写生句。字余りであるが「白白が」の強い連呼が中七の「沸き立つて」に掛かり、咲き始めた無垢な白木蓮の美を際立たせる。「沸き立つてゐる」の措辞が思い浮かぶまで随分推敲されたことだろうと感心した。

頬白や峡の山里ここに尽き 中村 敬子

峡の山里とは、山と山との間の狭い村里。山中の処どころの高枝から頬白の囀りがしきりに聞こえる。村里といつても十軒ほどの小さい村で、歩けばすぐに山道にぶつかる。「ここに尽き」の把握が確かで、印象鮮明。

透明な声 耳許に青き踏む 中村 東子

野遊びに出掛けたところ「透明な声」が耳もとに聞こえてきたという。透明な声とは、くもりなく明らかな声。先ずは鳥たちの声、せせらぎの音、風の音ということであるが、草樹の声も聞こえたかもしれぬ。いずれにせよ心地よい声で、それが踏青の大きな収穫。

芝青み縦横無尽の土竜たち 中村 幹子

穴の中の土竜と、その上の青い若芝を詠む。土中の土竜を見たことがなく「縦横無尽」かどうか知る術もないが、この土竜が思う存分活動していることは確か。正月に行われた子どもたちの「土竜打ち」を掻い潜って今日も田畑を荒らす。

西行にあらねど我も花の下 野沢 慶子

望月の日を狙って命を終えた西行。その西行を慕う者は多い。この句の作者もまた「我も花の下」と詠む。吉

本隆明によれば、西行の「花の下にて春死なん」の歌は「一本の桜の木のしたで、眠るように憩うように息途絶えたい、と願っている歌」（『西行論』）だという。西行にとつて「花」は浄土の花。作者は西行のように息途絶えたいと思つて花の下に居たわけではなからう。西行を偲び、西行の心に少しでも触れたいと願つたのだろう。

椿落ち地軸の少し傾くか 橋本 恭子

「地軸の少し傾くか」の誇張がこの句の全てである。椿が重いということだけを言っているのではあるまい。落椿の持つ妖気や毒々しさもまた、地軸を傾かせる遠因になつてゐるに違ひないのだ。

蠟梅の無垢なる光妻訪はな 長谷川菊男

「妻訪はな」から中村草田男の〈妻抱かな春昼の砂利踏みて帰る〉を想う。「妻訪はな」の方がより純化している感じが、妻と離れたところに居る作者の現在の心境が窺える。「蠟梅の無垢なる光」は妻であり、夫婦間で共有したい光でもある。

ぶらんこに腰掛けてゐる子守り翁 浜田 優子

確かに、子どもばかりがぶらんこに腰掛けているわけではない。預かつた孫を遊ばせているご老人だつて、

ぶらんこに腰掛けている。そう言われて気付いたが、よくその場面を見つけたものだとして作者の句作に感心した。

春日傘あの日の母は振り向かず 原田ミチ子

「あの日の母は」という切出し方は、何かドラマを見ているみたい。いろいろの事情で子どもと離れることとなつた若き母。その時の春日傘を差した母の面影が今も脳裏に焼き付いている。「振り向かず」がまた深刻なことをもの語っているが、詳細は詮索するまい。

体温のやうな歳時記春炬燵 平野 豊雄

「体温のやうな歳時記」とは、推測するに、俳句歳時記を毎日繰っている間にその歳時記が作者自身と一体化したということ。勉強家ならでは一句。歳時記は言葉の宝庫。どういふ季語が採り上げられているかが解かるし、例句を見て季語の用い方のバリエーションも学べる。

風船の萎みきれない無念さよ 福井 芳野

こんなところも詠めるのかと驚いた風船の句。ヘリウムを充填したゴム風船は時間の経過とともにヘリウムが抜けていき、やがて浮力を失ひ萎む。直射日光を浴びて破裂するものもあるが、作者の見た風船は情けないほど中途半端に萎んでいる。ぼくは、切腹したのになかなか



死ねない武士や軍人を想像した。「早く介錯してくれ」と下五の「無念さよ」がそう思わせるのである。異色作。

啓蟄やGパンびよんと跳ねて履く 本多 遊子

「Gパンあるある」の句。少し長めのGパンでしかも股上が深いため、脚を入れてから一瞬空中へ跳びGパンを腰まで収めて履いたのであろう。足先が上手く出ましたか？ 奇しくも啓蟄の朝。輝かしい一日が始まる。この句も日常の瑣事をさりげなく詩に昇華させている。

静かなる宴ありけり花月夜 松本 余一

満開の花に霞掛かった月が差しこむ美しい花月夜。この句では物音が一切聞こえない「静かなる宴」を詠む。宴といつても、人間が静かに宴会を楽しんでいるのではなく「花」と「月」だけが織り成す夜の宴。静謐な感じが何とも言えず、まことに美しい。

沓脱に春泥重し居開帳 水谷 光子

居開帳は他所へ出さずに、その寺で行う開帳をいう。沓脱は寺の上がり口の履物を脱ぐ所で、そこで脱いだ靴の泥が沓脱に付着していたのだらう、その春泥の重たさうなこと。春は雪解、春雨などのために泥濘が著しい。「春泥重し」には春という季節の確かな把握がある。

餌台や散る花に積む雀の餌 持田きよえ

雀のための餌台。そして、そこに散った桜の花びら。夥しい数の花びらが一枚一枚重なり合い、餌台を埋める。掲出の句では、作者がその花びらの上に餌（施行米）を積んだのだらう。小さな命のための功德。

増殖するも詩魂は一つ春の星 森尻 禮子

「悼」の前書きがあつた。三月七日に逝去した詩人の清水哲男氏の追悼句である。同氏はネット上に『増殖する俳句歳時記』を立ち上げ、二十年間その運営に、執筆に、心血を注いでこられた。『魁洗う人』他の句集も出されており俳句への造詣も深かった。この句の「詩魂は一つ」は、これから私たちの進むべき一本の道への合言葉のようでもある。明るい春の星の下、増殖しましょう。

芽吹きたるロマネコンティの葡萄の木 山田 雅子

「神の創造物」といわれるワイン。この句のロマネ・コンティという高級赤ワインはフランスのブルゴーニュ地方のコート・ド・ニュイの栽培地で作られる。南東向き斜面に位置し、西風を受けず、日の出と共に太陽が夜露や湿気を払う。その葡萄の木が芽吹く。高級ワインのため試飲は出来ないようだが、作者は農場を見学した時、その芽吹きに神聖な雰囲気を感じたに違いない。

## 関句会のお知らせ

7月25日(土) 午後一時十分開場

会場 国分寺労政会館 第一会議室

JR・西武線「国分寺」駅南口徒歩七分

7月23日(土) 午後一時十分開場

会場 台東区民会館(浅草) 特別会議室(中)

地下鉄・東武線「浅草」駅下車徒歩十分

※8月は夏休み、9月は国分寺での句会開催を予定。

◎会費 千円(当日承ります)

◎当季雑詠・四句(未発表句)

「関」内の句会で既に発表した句はご遠慮ください。

◎欠席投句する場合は開催日の五日前に発行所へ

①句を書いた短冊、②四句と名前を書いた用紙、

③返信封筒、④参加費千円を事前郵送すること。

ただし、句会が休会の場合には投句できません。

◎問合せ先 関俳句会(080・6770・5485)

※コロナ感染状況によっては休会にします。

## 雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木幹夫

### 第13回【鳥獣の鳴き方】

「ギョエテとは俺のことかとゲエテ言い」(斎藤緑雨)と川柳にあるが、ジョージ、シェーン、ジョン、ジヨバンニヤン、ヨハネが同一の名前から派生している事実気付いたのは語学を始めて大分たつてからだ。一つの名前が国によって発音の仕方が異なるのだ。

冬の早朝、鶏小屋の方でクックドウドウルドゥー(英語)と声をする。「」をてくう とをるもう とをるもう」と東雲に鶏を聞いたのは憂愁の詩人、萩原朔太郎。動物の声のオノマトペも世界各国さまざまだ。コケコッコーとは日本典型の鶏鳴。

朔太郎の耳は海外詩を読んだ経験が元になったのだろう。「O」と「U」の音を合成し鶏の声とした。マンドリン奏者、朔太郎の面目躍如。ちなみに犬猫の声は「のを あある とを あある やわあ」(犬)「おわああ、ここの家の主人は病気でず」(猫)と暗鬱に響いた。

少年時、動物好きが高じて獣医になった次兄のお陰で沢山の生き物に触れた。犬猫はもちろん、目白、鳩、山羊、兎、二十日鼠、亀。しかし季語の「亀鳴く」を耳にしたことは一度もない。万年を待つべきか。春よ来い。

公益社団法人 俳人協会